

## 平野光康さんを送る

清水 忠 雄 (物理学教室)

物理学教室およびその周辺で行なわれてきた研究実験を、長い間しっかりと支えてきて下さった平野さんを送る時がとうとうきてしまいました。平野さんが理学部にはじめて来られたのが、昭和22年ということですので、実に40年の長きにわたり働いていただいたこととなります。この間にどれだけ多くのガラス装置を作っていたことか、またその作品が、どれだけ研究のために役立ってきたことか、数えあげたらきりがありません。

夏休み前のガラス細工実習で、ガラス管の切断からはじめて、おきつぎ、簡単なガラス器具の作り方を手にとるようにして教えられた経験をおもちの人が多くでしょう。実験室で装置に事故がおこれば、いつでもとんできて修理をして下さり、また時には、素人が考える無理な設計、注文にも根気よく対応してよりよい解決を見出して下さいました。

40年の間には実験機器も大幅に進歩し、研究室の中もだいぶ様変わりしました。先端的な研究を進めるためには、高機能な、微妙な、そして高価な機器をずらりと並べることも必要になりました。しかしそれにもかかわらず、いやむしろ先駆的な実験をしようとする程、ガラス器具、装置のもつ重要性は、少しもおとろえてはいません。十分に高い真空度が保てること、清浄であること、広い温度範囲に堪えられること、それに加えて加

工性がよいことなど、ガラスのもつ優れた性質はまだまだ捨て難いものです。ただし高度の実験になるにしたがい、複雑な構造、困難な接着、高い精度などなど、ガラス加工に対する要求もますますきびしいものになってきました。ガラス装置が高い評価を受けるのも、平野さんのような優れた技術者があってこそなのです。

ガラス技術者が、研究室のすぐそばに居てくれるということが、どんなに大切なことかあらためて認識している次第です。これはただ単に装置の急な事故や、急いだ改造などに、ただちに応じられるという便利さだけではありません。研究室で行なわれていること、部屋の雰囲気、また時には研究者の個性までものみこんだ上で仕事ができるということで、このような共同作業が素晴らしい成果を生みだしてきたということなのです。平野さんの払ってこられた御努力に対して、深い敬意と感謝を表したいと思います。

平野さんは、知る人ぞ知る、理学部内でも1、2を競うテニスプレーヤーです。スポーツで鍛えられてきただけあって、とても退官されるような方とは見えない若々しさです。これからも時々理学部にプレーにおいで下さい。そしてその折には是非仕事のことでも、相談にのっていただければ幸いです。

新しいご生活のスタートをお祝い申し上げます。